

## 「実践研究」論文のありかたをめぐる

無藤 隆

1. 実践研究が重要になったことに少なくとも研究者の外と内の2つの動機がある。外の動機としては、アメリカ追従の秀才スタイルが嫌になったこと、教職免許法で守られていた教育心理学に対して我々自身またまわりから、実践にいかに関立つかという批判が強くなったことがあるだろう。内側としては、一方で統計を駆使した立派な心理学の研究を書いて研究者の位置を確保し、その一方で自分の関わりのある実践現場で役立つことをやっていこうとする、二本立て研究スタイルが嫌になったり、もっと直接に現場の関わりを論文にして研究していきたいと思う人が増えてきた。

2. 臨床性と普遍性の対比がある。臨床性とは心理臨床の意味ではなく、特定の時間空間関係の下で個別具体的に相手に関わって役立とうとすることである。普遍性とは、個別の事例を越えて、ある主張がいかなる条件の組み合わせで当てはまるかを示したり、もっと根本的に教育心理学の枠組みについて見直しを求めたりすることである。そのどちらも実践研究としてありうることである（例えば、佐藤さんの研究は後者になるだろう）。

3. 実践現場を記述しようとするものと、教材を開発し提供したり、自らの開発した教材の有効性を主張したりするものがある（市川さんの言う、分析指向と開発指向に対応するのだろう）。後者がより実践的だとは必ずしも言えない。記述から実践者にまた現場に関わろうとする学生や研究者に見通しや実践を見直す新たな視点を与えることが出来るからである。

4. 実践研究の周辺としてどんな研究を想定するか。基礎—応用という枠組みがある。基礎的な心理学、教育心理学、さらに実践的な教育心理学、という流れで応用的な関係が想定される。確かにそういった見方もあり、事実基礎的なものの知見は実践で有用となることもある。どちらが「偉い」といったことではない、知識のありかたとして、基礎—応用という流れを想定してよかろう。その一方で、実践自体が応用と呼ばれるものではなく、そこに求められるべき基礎的原則があるのだとする立場もある（佐藤さんは、城戸幡太郎の言を引用していた）。そこでは、むしろ、周辺領域は同様に「応用」的「実践」的諸学問、特に教科教育の研究に広がり、教育心理学的実践研究との違いは消えていくだろう。

5. 質的一量的という方法論の区別も関連してくる。もちろん、どちらの方法も、基礎研究にも実践研究にも

用いることが出来る。また、どちらの方法にも優れた使い方も駄目な使い方もある。量的方法の方が細部まで方法のよさの基準をマニュアル化できるし、極端には有意な違いのある数になるのに対して、質的な研究には明快な基準を立てにくく、論文全体を読み、かつ先行研究についてもよく分かっていないと評価しにくいのであるが（もっとも量的な方法は中身を理解しなくても評価できるというのも不思議な慣習だが）。だがともあれ、現実には、いわゆる原著論文になるような比較的基础的な研究は統計的量的方法を用いているものが多く、質的な方法は実践的研究に多いことも確かである。その上、実践を解明しようとする場合、量的な方法を用いても、質的な方法を併用しないと、その実態に迫れないことも確かにありそうだ。そこで、質的方法をいかにして評価するか、その優れたまた駄目なありかたとは何かの議論が必要になる。

6. 現場の実践者と研究者との関係をいかにして組んでいくか。その協力体制が問題となる。仮に実践者がイコール研究者の場合でも、特にケース研究に近づくと、その対象となる子ども・学生やクライアントは論文にどう関与するのは問われるべきだろう。著者に一員にならないまでも、どうやってまたどの程度論文の分析の内容に了解を求めるか、さらには貢献を求めるか。実践者と研究者が別な場合には、さらに深刻な問題が生まれる。時に現場からデータの搾取だという文句も出よう。ちょっと現場に行って、アンケートか何かをする方がよほど搾取的ではあるが、実践者から見たときに、長期的に関わるからこそ、よけいに研究者との率直な関係を作りたいとか、論文の内容が気になるといったことも出てくるのである。対等の共同研究者として行っていくということが本筋だろうが（著者になることを実践者が望むとは限らないが）、研究者としての分析がいつも実践者の考えや思いと一致するとは限らない。一致することがよいと思える場合もあるが、むしろ、実践者の気づかない視点を出すことに意味があることもある。

そういった研究論文をまとめるという営みと並行して、あるいは時にそれと矛盾して、論文を書くことを放棄して、研究者の立場にせよ、実践者を援助することに専念しなければならないこともある。活動としての研究（慶応大学の鹿毛さんの表現）というべきか、学校心理的实践というべきか、分からないが、研究者が実践的な見方や力を身につければよけいにそういった求めが増えるだろう。そういった活動の様子を記述していくスタイルの論文もまた書かれていくべきではなかろうか。